

人と人、人と地域のきずなを結ぶ情報誌

京葉銀行

# きずな

2026  
秋・冬号  
No.33

【特集】

八街市を中心に活動する和太鼓演奏の  
集団。楽しく打ち鳴らす「共生」の音

八街市 八街和楽太鼓

【散歩道】 豊かな自然を満喫する散歩道

大自然と広大な田園風景を満喫し  
名勝「勝間田の池」を目指す

# 八街市を中心に活動する和太鼓演奏の集団 楽しく打ち鳴らす「共生」の音

八街市  
八街和楽太鼓



八街市を舞台に40年以上の歴史を持つ和太鼓を奏で続ける団体。  
「共生」をテーマに健常者とハンディキャップを持つ人がともに同じステージに立ち  
まちのイベントに多数出演するなど精力的に活動しています。



鈴木光成さん

当初は15人程度でスタートした和楽太鼓の会ですが、現在の会員数は38名まで増加。大人が23名に子どもが15名。ハンディキャップを持つ人も9名所属されています。現在は全員が大人になったため、大人組の中の「チャレンジ組」という枠組みで元気に活動が続いています。

ハンディキャップを持つ人だけでなく構成されている団体は県内にもいくつか存在しますが、「共生」「ミックス」の形で一緒に活動しているのはとても珍しい存在です。

団体名の太鼓の前に付けられた「和楽」とは「なごんで」「たのしく」として「共生」の意味が込められたもの。この会の運営や活動に対する気持ちが進められています。

現会長の鈴木光成さんが「八街和楽太鼓」と縁を持ったのは今から10年ほど前のこと。もともと町の催しなどで時折太鼓をたたいていた経験のある鈴木さんが、ダウン症の息子さんにも太鼓を経験させたいと考え、会を訪問したのがきっかけでした。

グループの  
活動テーマは「共生」

「八街和楽太鼓」は今から40年以上前、地元の有志、渡辺哲夫さんによつて立ち上げられた団体です。活動はその会の名の通り和太鼓の演奏です。この会の大きな特徴は健常者の方だけでなく、ハンディキャップを持つ人も多く参加されている点です。

## 誰もが自然に同じ空間で 過ごす大切な居場所

練習は月に4回。日曜日2回と金曜日2回、市の公民館などを会場に行われています。夏のイベントが頻繁に行われる時期には毎週のようにイベントへの参加があるため「本番」が練習の場になっています。

「この団体は先代の渡辺さんが『とにかく楽しくやる』と決めて会を続けてこられた伝統を今もそのまま継承し、練習や本番でも、常に楽しい雰囲気崩さずに守り続けています」と鈴木さん。こうした姿勢が功を奏し、走るようなつらい運動を嫌がるような子でも「太鼓は楽しいから行く」と自発的に喜んで参加しています。

学校を卒業してしまうとハンディキャップを持つ人は多くの場合、周囲との交流や活動の場がなくなってしまう傾向があります。そうした中で、この「八街和楽太鼓」は卒業後もずっと社会との繋がりを持ち、楽しめる貴重な居場所（余暇の場）としても機能しています。

「共生」「ミックス」の姿は練習風景にも表れています。「ここでは年上、新人といった意識が少なく、自



然とお互いから学ぶ環境で練習を行っています。ベテランが初心者に教えるだけでなく、子ども同士で教え合ったり、上手な子どもが大人に教えたりと、誰もがフラットに関わっています」と鈴木さんはその様子を語ります。

ものすごい集中力で熱心に太鼓に向かっているメンバーがいる一方、練習に今一つなじめないメンバーにも存在します。そんなメンバーにも、うまく演奏させるために厳しく当たるのではなく、とにかく「楽しく」が最優先されます。

「メンバー一人ひとりの得意分野に合わせて、個性が発揮できるよう練習を行っています。例えば全員のメンバーは、楽譜が読めなくても素晴らしい音感を持っており、まるでステイビー・ワンダーのように全身でリズムを取りながら見事に演奏する姿は見る人を惹きつけます」。鈴木さんはその様子を思い出し、とても嬉しそうに語ります。

ふれあい夏まつり」。朝の10時から夜の9時まで1日かけて行われる大きなお祭りです。

「八街和楽太鼓」の出演は中央ステージの一番手。開会式のすぐあと、祭りのオープニングを飾る演奏です。出演は10時半からなのですが、9時半ごろには「和楽太鼓」と染め抜かれたお揃いの黒いTシャツを着たメンバーがステージ裏に続々と集合。それぞれ気合と緊張の入り混じる顔で出番を待っています。

この日演奏した曲は、「組太鼓（オリジナル）」「パプリカ」「落花生音頭」「火の国太鼓」の4曲。約20分のステージで、1曲ごとにメンバーが入れ替わり曲を演奏していきます。

太鼓の強いリズム、幾重にも重なりあう太い音、そしておなかに響くような空気の振動。実際に拝見すると和太鼓の演奏こそ「生」で見ると、と感じさせられます。太鼓の音に引き寄せられるように、どんどんステージ前に来場者が集まり、演奏の終わりには大きな拍手が起きます。

曲の途中の見どころは、1曲に6〜7個も詰め込まれた決めポーズ。バチを斜めに振り上げて静止させ

太鼓で演奏される曲には大きく2つのジャンルがあります。太鼓だけで奏でられる「組太鼓（太鼓のみのアンサンブル）」、そして盆踊りなどでもお馴染みの曲に合わせて太鼓をたたく「曲打ち」です。会では数曲の「組太鼓」を含め20数曲のレパートリーがあります。太鼓の打ち方には40数種類の基本打ちの「形（かた）」があり、それぞれの曲に振付けて太鼓独特の楽譜にしていき、これをもとに皆で練習していきます。

当初は太鼓の数も揃っておらず、主に古タイヤに布を張り練習を行っていました。現在では太鼓の数も増え、毎回本番さながらの練習が行われています。

その練習の姿は、「うちの会では健康者の子どもたちにとっても、ハンディキャップを持つ人と同じ空間で過ごすことが当たり前になっており、言葉で教えられずとも自然と共存や社会勉強を学んで成長していく環境が生まれています」と鈴木さん。

## いざ祭りの本番へ

この日「実演」をお見せいただいたのは八街市の夏の恒例行事「八街

る、まるでヒーロー戦士のような見事な姿です。グループ全体で決めポーズが決まった瞬間の格好良さ。チームの結束の固さもそこから伝わってくるようです。

本番を迎え、観客の前に演奏で一気に力を解放。演奏後に大きな拍手が会場を包み込むこの「快感」が、メンバーの方々の太鼓愛にも繋がっているでしょう。ステージを終わる汗をびっしょりとかいたメンバーの方たちの爽快で、ちよつと疲れた顔が、その素晴らしいさを語っているようです。

観客の皆さんに「見せるための舞台」として叩くのではなく「自分たちが世界一楽しむ！」という会の方針をそのまま体現したようなステージの姿が、観客の心を揺さぶるのが分かります。

伝統的な和太鼓界のしきたりを尊重しつつ、会をさらに魅力的にするための「技術や演目の継承」も進



められています。

他団体からの「組み太鼓」の正式な継承もその一つ。この会ではメロディに合わせる「曲打ち」が主流ですが、鈴木会長はより難易度の高い「組み太鼓」にも今後は少しずつ挑戦したいと考えています。

ステージの横に集合する人々の中の一人を指さし「うちの息子は、両サイドを刈り上げたモヒカンがトレードマークなんです。この手触りが気持ちよくて好きだね」と息子さんに近づき、愛おしそうに髪の毛をシャリシャリと撫でているときの鈴木さんの優しいまなざしが、とても印象的でした。



豊かな自然を満喫する散歩道

# 大自然と広大な田園風景を満喫し 名勝「勝間田の池」を目指す

榎戸駅の周辺は、豊かな田園地帯と森を有する緑あふれる地域。  
名勝、勝間田の池を目指しながら、広々とした風景を心行くまで堪能します。



勝間田の池。西行法師来訪の伝承がある名勝地。池の中央には厳島神社が鎮座しています。



散歩の出発点、総武本線榎戸駅



豊かな自然を満喫する  
小さな旅

今回の散歩は、総武本線の榎戸駅を出発し、森や畑が広がる広々とした風景を堪能しながら、まちを大きく周回。途中、佐倉市の指定文化財（名勝）になっている勝間田の池まで足を延ばします。

榎戸駅西口を出て進むと、すぐにた街道に出ます。ここを左折し街道沿いを歩きます。周りには高い建物がなく、視界が広がります。

左手の氷川神社を目印に右折。街道を背にして進むと道の両側には遠くまで広がる田園が続きます。八街市は落花生の名産地であるため、落花生の緑の畑が目立ちます。

田園の風景を楽しみながら進み、突き当りを右折すると、道沿いの田

畑はさらに広さを増して視線の及ぶ限り続き、その上には空が気持ちよく広がっています。

道をまっすぐ進んでいくと、車が頻繁に往来する街道に合流。ここを左折し、勝間田の池に向かいます。

10分ほど歩くと右側に権現神社の鳥居の姿。その赤く小さな鳥居の向こうには、幅一人分ほどの細い参道が奥へつながっています。道は草木が生え、そこに覆いかぶさるように樹木の緑が囲む緑のトンネルが木漏れ日の中に浮かび上がります。目を凝らすと100mほど先に小さな祠が見えます。鳥居越しに緑のトンネルをのぞき込んでみると、何やら別の世界に通じているような感覚になります。

鳥居から数m離れたところには、



氷川神社  
榎戸駅から出た街道沿いにあります。八街神社の分社で真井原分社と掲げられています。



今回の散歩コース周辺には落花生畑が多く見られます。広い空に落花生の濃い緑の葉が風に揺れていて、とてものどかな気持ちになります。



権現神社  
赤い鳥居の奥には樹木が並ぶ参道があり、緑のトンネルになっていて、その先には小さな祠が見えます。



諏訪神社  
木々に囲まれ、静かで雰囲気のある神社です。鳥居の手前にはとても立派な木がそびえ立っています。



水田地帯に差し掛かると、風景は一変します。青い空と森と森の間に水田がずっと続く、のどかな風景が広がっています。

森の奥に通じている別の道があります。ここが今日の目的地でもある勝間田の池に通じる道です。うっそうとした樹木に囲まれた道を進んでいくと、いきなり目の前に広々とした畑が広がります。右に田園を見ながら山沿いの道を5分ほど進んでいくと、「勝間田の池」と書かれた小さな看板が。案内の通りに道を右折し、まるで江戸時代の街道のような小路を森の奥に向かって進んでいきます。道の先はなだらかな下り坂。すると樹木の間から水面のようなものが見え、次第に美しく幻想的な池の全容が現れてきます。

中央に繋がる土の通路が伸び、その先には小さな神社（厳島神社）が鎮座しています。勝間田の池は案内板の解説によると、古来より下勝間田の田畑などに水を引いて供給するために役立てられていたようです。

みずなしと聞きてふりにし勝間田の池  
あらたむるさみだれのころ

（水が無いということで長い年月言いつがれてきた勝間田の池だが、五月雨が降り続き、池の様子もすっかり変ってしまったものだ）と、この池を詠んだ歌も残されています。まさにそんな歌心を刺激される、不思議な魅力を持った空間です。

池をあとに、先ほどやってきた街道を分岐点まで戻り、今度は左方向の道を駅方向に向かいます。道の右

側に諏訪神社を見ながら進んでいくと、小さな橋に差し掛かります。水田地帯に水を供給する水路にかけられた橋です。道を右折し、水路に沿うように続く細い道に進みます。すると、風景は街道から一変。見えるのは、水田と森、畑の中を縫うように走る水路、そして空。きつと何十年も前から変わらない風景がずっと連なっています。目に入るものは緑と青と土の茶色。そんな風景の中をひたすら歩いていくと、いつの間には考えることが少なくなり、気持ち静かに晴れていくような感覚に包まれていきます。

濃い緑の風景の中を歩いて行くと散歩の最初に歩いた道に行きあたります。ここを逆にたどり、散歩の出発点、榎戸駅に至ります。

# 千葉の野に生きる 野花と野草

-17-

厳しい夏が終わり、過ごしやすい季節が到来しました。気候も穏やかなこの時期は、お散歩にも最適な季節です。

普段の散歩コースでも、道端に目をやれば、意外なほど多彩な野花や野草を見つける事ができます。その中の1つか2つ、名前や特徴を覚えておけば、散歩の楽しみが1つ増えるでしょう。

## ■エビヅル

エビヅルという名は海老と関係なく、その実の色から来ています。日本では古来、葡萄色と書いてエビイロと読み、ブドウのこともエビと呼んでいました。エビヅルは日本に自生している野生ブドウの1つです。ヤマブドウよりも標高の低い明るい場所を好み、各地の山野、丘陵、



川原、海辺の林縁で広く見ることが出来ます。

開花は6〜8月。葉と対になって伸びた円錐形の花序に咲く小花は淡い黄緑色になります。近くで観察すると、5つある花弁の元の部分は離れてますが、先端が合わさって

いるのが分かります。開花と同時にこの部分は、まるで帽子を脱ぐように落下します。

秋には、小さいブドウの房を実らせます。木に巻き付いて育つため、日当たりの良い、高い場所に果実は多く実ります。果実から採取される赤紫の色素を「えび色」といい、媒染をしなくても着色がよいため古くから染料として使われていました。花言葉は「陶醉」。ブドウ酒にちなんだものかもしれません。

## ■ノコンギク

ノコンギクは、本州〜九州の草原に広く見られる多年草で、いわゆる「野菊」を代表する植物の1つです。地下茎が増えていきます。茎はまっすぐで、中には、ほかの植物に寄りかかりながら斜めに伸びていくものもあります。高さ0.5〜1m。花には筒状花(花弁が細長い筒状にくっついてできた小さな花)と舌状花(花びらの先端が平たく広がって、舌のような形状になっている)の部分があり、内側の筒状花は黄色、外

側の舌状花は優しい淡青紫色をしています。茎はよく枝分かれし、短毛が密生しています。

開花は9〜11月。秋風の冷たさを身を感じる始まるころ、草原で薄紫色の可憐な群生を見ることが出来ます。

花言葉は「忘れられない想い」。秋の終わりを告げるように静かに咲き、過ぎゆく季節への郷愁を感じさせる姿からついたとされます。また「長寿と幸福」という花言葉もあり、これは菊が古くから長寿を象徴する花とされてきたことに由来しています。

